
君に伝えたい心の音

桜坂 美雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君に伝えたい心の音

【Nコード】

N3633Q

【作者名】

桜坂 美雪

【あらすじ】

吹奏楽部に所属する近藤花梨　こんどうかりん　は、16歳のごく普通の少女。だけど、家には両親がいない、学校では一人しか友達がいらないという孤独な少女…。

不器用で、ちょっと冷たい雰囲気を持つ主人公をどうぞ温かく見守ってやってください！

実は、些細なことにすぐドキドキしちゃう子なんです（*^|^*）

第一話 繰り返される退屈な日常

「はあ……」

私は本日五回目のため息をついた。

いいことなんて一つもない。毎日、同じ退屈な日常が繰り返されているだけ。

日常に絶望している私は近藤花梨^{こんどうかりん}。高一。

私は今、部活をするために音楽室へ小走りで向かっている。

部活なんか、本当はしたくない。私は幼なじみの三月香苗^{みつぎかなえ}に付き合っ
って吹奏楽に入っただけだ。

その香苗はたった五ヶ月で吹奏楽をやめてしまった。なんか、練習
が思ったよりきつかったらしい。

なんて、香苗は自分勝手なんだろう。まあ、今回に限ったことでは
ないが。

香苗とは、幼稚園から今までのずいぶん長い付き合いだ。その付き
合いの中で、約束をすっぱかされたり、裏切られたりしたことは何
十回もある。だから、今更これくらいで何とも思わない。

それより腹立つのは自分だ。

私も香苗に続いて吹奏楽を辞めたかったのに、他の人の目が気にな
って辞められずにいる。

ああ、イライラする。

そんな事を思っているうちに、音楽室の扉の前についた。

「……はあ」

私は本日六回目のため息をつく、扉を開けた。

「…こんにちは」

私の儀式的なあいさつを、他の部員達はダルそうなバラバラなあいさつで返す。

で、それが終わると、私はさっさと部員指定の鞆の置き場所にカバンを置いて、自分の楽器を取りに行く。

私が吹いている楽器は、ユーフォニアム。略してユーフォ。

金管で低音の代表的なチューバの小さいバージョンと違って、いい。ユーフォ自体は中音だけだね。

うん？チューバが何かわからない？

えっと、チューバとはにかくでかい。それ以外説明しようがないんだよね…。

うん。説明、以上つ。

私はユーフォが大好きだ。

メロディやソロがたくさんあるし、何より音が好き。

だけど…、吹奏楽は人間関係が難しい。

吹奏楽はかなり個性的な人達が集まるから、正直、私にとっては付き合いくい人達ばかりだ。

だから、吹奏楽を辞めたいと思う。

「花梨ちゃん」

私が楽器ケースからユーフォを取り出していると、ホルンの三年の先輩で部長でもある 荒井美里先輩あらいみさとが声を掛けてきた。

「…なんですか？」

私はあからさまに話しかけて欲しくないという、雰囲気をにじませながら答えた。

荒井先輩はそんな私の様子にたじろぎながら、口を開く。

「いや、実はね…、吹奏楽に入りたいっていう一年がいてね…」

「えっ！？この時期にですか？」

「いまは十一月。この時期に入りたいなんて…」

「うん。それで、ユーフォに入りたいって…」

私が顔をしかめたのを見ると、荒井先輩は慌てた。

「ああ。けどその子は経験者みたいだから、教えてやる必要はないし、大丈夫よ。で、その子明日の部活から来るらしいから。えっと、仲良くしてやってね。」

そう急いで私に言っと、荒井先輩はさっさと椅子に置いてあったホルンを持って練習場所に行ってしまった。

仲良くなんて冗談じゃない。

今までユーフォは私一人だったから、練習時間が心休まる時だったのに…。

最悪。どうしよう…。

「かーりんちゃんっ」

私の背後から甲高い声が聞こえた。

私が振り向くと、その声の主はにっこり微笑んだ。

彼女は一年でクラリネットを吹いている駿河美鈴^{すりがみすず}。

長い髪を一つに束ねていて、その髪の毛先がくるんとカールしている。顔は可愛い系だし、言動も可愛いから、男子にモテているらしい。

正直、話したことは数えるほどしかないのだが…。

「…駿河さん」

「もうっ。やだっ。駿河さんじゃなくて、美鈴って呼んでよ。私と花梨ちゃんの仲じゃない」

だから、話をしたことあんまりないんだって。仲もクソもあるかい！と、私はツツコミをしたが、無論口には出していないので、駿河さ

んは話を続けている。

「でさ、花梨ちゃん。定演の曲吹けてるう？」

定演とは定期演奏会のこと。私の高校では毎年三月に吹奏楽の部員達だけで演奏会を開いている。三年の先輩達にとっては最後の大舞台だ。

「うん。…まあまあかな」

「さっすが、花梨ちゃん。ユーフォ、うまいもん。経験者だものねえ」

駿河さんは浮かれた声で言う。

そう。私は中学の時もユーフォを吹いていた経験者。だから、一人でユーフォを吹けた訳だが…。

部活のつらさを中学で十分わかってたはずなのに、なぜ香苗に合わせ入っちゃったのか…。

昔の私を呪いたい。

「だけどさあ、ユーフォに誠くんが入るんでしょ？定演までに誠くん間に合うかなあ…？」

「えっ、誠くんって誰？」

…まさか、男子？

「ええ？知らないのお？しみずまこと清水誠くん。超イケメンじゃん。花梨ちゃんが羨ましいっ。同じパートだなんて」

いやいや、そんなに羨ましいんだったら代わってあげるよ。

男子なんて冗談じゃない。

イケメンだろうがなんだろうが嫌だ！

「でさっ、花梨ちゃんにお願いっ」

駿河さんは勝手に話を進める。

「誠くんが入部したら、メアド交換するでしょ？そのメアドを私に教えてくれないかなあ？」

駿河さんは可愛らしく小首をかしげ、両手を合わせて私を見上げる。私の顔に冷や汗を流れるのを感じる。

多分、いや絶対メアドなんて、聞かないと思うけど…。

「…うん。わかった」

私の口がそう勝手に口走っていた。

ああ…。バカ。なんで断らないのよ。
そう思ったが、後の祭り。

「はあ…、もう最悪…」

今日は何回ため息をつくんだろう？

私は一人、頭を抱えた。

第一話 繰り返される退屈な日常（後書き）

こんにちは（＾Ｏ＾）ノ

はじめまして！桜坂 美雪です。

初めて小説を書くのでドキドキしています（・|・；）

まだラブっぽいところは全然ないですが…。

というか、それ以前に男子すらまだ出てきていません…。

こんな作者ですが、気長に付き合ってください（＾|＾；）

第二話 忘れない過去

「仕事と私、どっちが大切なの!？」

お母さんのヒステリックな叫び声が聞こえてくる。

お母さん、やめてよ。

私はそう言いたくて、ベットから重い体を起こした。そして部屋を出て、リビングへと歩く。

リビングへ続く扉はかすかに開いていて、そこから光が漏れている。
「だから、何度も言っただろう?俺にとっては仕事が大切なんだよ!」

私はお父さんの怒鳴り声で足を止めた。

…お父さん?

お父さんの怒鳴り声なんて、初めて聞いた。

「…そう。でもね、あなたは仕事よりも、他の女のほうが大事だったりしてね」

…他の女?

お母さん、何言ってるの?

「…っ。それは…」

お父さん、動揺してる…。

何故?

「もう、我慢の限界よ。出て行くわ、この家を」
バアァン!

リビングの扉が大きく開け放たれた。

私の目の前には、目が血走っている女の人がいた。
誰?この人…。

女の人は私の姿を認めると、大きく目を見開いた。

「…花梨。」

紛れもなく、お母さんの声だった。

この人、お母さん？

いつも優しい笑みを絶やさなかったお母さんが、今は顔が醜く歪んでいる。

誰が、お母さんをこんな風にしたの？

お母さんは私を見て動揺しているようだったが、次の瞬間、無表情の仮面を被り、私を突き飛ばした。

「痛っ……！」

壁に体をしたたか打ちつけ、体に激痛が走った。けど、その痛みを無視して立ち上がる。

このまもお母さんを追いかけないと、お母さんはどこかに行っちゃう。

でも、体が前に進まない。

「お母さん！」

私は必死で叫んだ。

お母さんは、私の叫び声に振り向きもしなかった。手早く玄関に置いてあった靴を履き、玄関の扉をあける。

「行かないで！」

バタンツ！

扉が閉まる音が響く。

私は体の痛みも忘れて扉に駆け寄り、扉を開けた。

扉を開けた先には……、漆黒の闇が広がっているだけ。

クラリッ……………。

世界が回り、私は漆黒の闇に飲み込まれていく……。

ピリリリリ…！

パシッ！

私は重たい体を起こし、目覚ましを止める。

「ふぁ…。」

久しぶりに最悪な夢を見た。

お母さんが出て行った時の夢なんて、最近は見えてなかったのに…。
今日も最悪な一日が始まる予感。

私はそのそとベットから這い出し、制服をパパッと身に付ける。

その後、部屋を出て玄関に向かい、置いてある靴を確かめる。

そこには、いつも通り私のローファーと私の普段の靴しか置いていなかった。

「はぁ…」

一日のため息はここから始まる。

私は心のどこかで期待しているのだ。

お父さんとお母さんの靴が玄関に並んでいることを。

お母さんが出て行ったのは、五年前。

私が小学校の五年生の時だった。

あの頃は、毎日泣きながら過ごしたっけ…。

お母さんは今生きているのか、死んでいるのかさえ、わからない。
お父さんかというと、家庭より仕事が大事な人でめったに家に帰っ

てこない。

五年前、お母さんが出て行った後、お父さんは私にお母さんが出て行ったことは誰にも言うなとだけ言った。

だから、おばあちゃんの家や親戚の家に私を預けるなんてことは一度もなかった。

おばあちゃんや親戚は多分、お母さんが出て行ったことなんて知らないだろう。

ずっと、私は一人。

寂しかった。

誰かに気付いてほしかった。

けど、そんな私の気持ちにはだれも気付いてくれない…。

そしてこれからも、ずっとそうだろう。

「…朝ごはん食べなきゃ」

私はそう呟き、無理やり玄関から目をひきはがす。そして、台所へ小走りで向かう。

台所に着いたら、まず油をひいてコンロに火をつける。

その後に卵を割って、フライパンに卵を落とす。

卵を焼いている間に、キャベツをみじん切りにしてお皿に乗せる。

そうしている間に卵が焼ける。で、焼けた卵もお皿に乗せる。

そうしたら、朝ごはんの出来上がり。

私はいつも通りに食卓につき、目玉焼きを食べた。

チャラララ…。

リビングの時計が鳴った。

ん？八時…？

「あー！遅れるっ！」

授業が始まるのは八時半。

家から学校までは最低二十分はかかる。

今から顔を洗って、歯磨きをして、鞆に教科書入れて…。

ああ…。間に合わない。

「どーしよー!」

私は叫びながら洗面所にダッシュして、バツと顔を洗って、歯磨きをして、鏡を見もしないで髪をとく。

そして、鞆をひつつかんで家を飛び出す。

「いつ…」

てきます、と言おうとして口を閉じる。

ダメだ。癖が抜けないな…。

あれから五年もたつのに…。

私は自嘲気味に微笑むと、駆け出した。

第二話 忘れたい過去（後書き）

こんにちは（＾ｖ＾）

更新がかなり遅れてすみません＾|＾；
パソコン打つの遅いんです。

話は変わりますが、今すごくうれしいです（＾　＾）
なぜかと言いますと…

私の小説を「お気に入り」にして下さった人がいたんです！
すごくうれしいですよ。

励みになります（＾　＾）

またまた話が変わりますが、次の話では、ついに男子が出てきます！
楽しみにしててください（＾・＾）ノ

第三話 いつも通りじゃない朝

「えっと、今何時だ？」

私は腕時計をのぞきこむ。

八時十分。

うう…。多分、遅れる。

チリチリッ！

「危ないっ！」

突然、自転車のベルと男の声が同時に聞こえた。

「えっ…！？」

私が誰かの声のする方を向いた瞬間に、ドンッと自転車に突き飛ばされた。

「痛…っ！」

私は無様にしりもちをつく。

朝からもう最悪…。

泣きたい気持ちを、ぐっところえる。

「わりい。大丈夫か？」

私は半泣きになりながら、声がした方を見る。

そこには…、私が通っている高校の制服を着た男子が立っていた。

顔は…、かなりカッコイイ。髪はワックスでもつけているのか、ピョンピョンはねてる。

その男子は私を心配そうに見つめていた。

…こういう男子、私の高校に居たっけ？

「…はいっ。大丈夫ですっ。」

私は急いで立ち上がった。

こういうカッコイイ男子には、あんまり関わりたくない。

「ではっ！失礼しますっ！」

私はぺこりつと頭を勢いよく下げ、足早に男子の横を通り過ぎようと…

「待てよ」

男子はいきなり私の手をつかんだ。

私の顔が一気に熱を持つ。

男に手をつかまれるなんて、初めてだ。

パシッ！

思わず、私は男子の手を払った。

「ああ…。わるい…」

男子は私に払われた手で、気まずそうに頭をかいている。

「いや…。なんですか？」

私は警戒心をあらわにして言った。

男子は私の言葉を聞くと、私の横を通り過ぎて、止めている自転車のところへ歩いて行った。

えっ？私を引き止めておきながら、行くつもり！？

私は腹立たしいというよりも、あきれてしまって何も言えなかった。

そんな私を尻目にサッサと男子は自転車にまたがり、次の瞬間、驚くべきことを言った。

「乗れよ」

「…はあ？」

私は思わず口をあぐりと開けた。

えっと、今なんて言った？

「ここに」

男子はきょとんとして自転車の荷台をトントンとたたいた。

どうやら男子は、私が口をあぐりさせているのは、自転車のどこ

に乗ればいいのかわからないからだと思っただけらしい。
いや、違っただけ！

この、天然男！

「早く。俺まで送れちゃう」

男子のちよつと苛立った声で、私は我に返った。

冗談じゃない。

「いや、いいです！」

私は必死に首を振って断った。

「…お前が、俺のせいで遅れるだろ？」

へえ…。以外に律儀なんだ…。

じゃなくて！

「いやつ。もともと遅れる予定だったし、本当にいいですから！」

「いいから、乗れよ」

男子は有無も言わさない口調で言った。

ここまできたら、いらぬおせっかいだ。

「そんなこと言っただけで、二人乗りにしたことないし…」

私はその男子の口調で半泣きになりながら、勇気を出して言葉を続けた。

この男子とは、なんとなく関わりたくない。

「乗れ」

最後には命令口調になり、男子はもの凄い顔で私を睨んだ。

もう、いいや。

「二人乗りで、コケたって知りませんからね！」

私は半ばやけくそになり、男子のそばへ寄って行って、自転車の荷台にまたがった。

「で、どうするんですか？」

もちろん、二人乗りは知っている。

よく恋人同士で、通学する時にやったりして、いちやつくのが定番。青春ドラマなんかでもよくやってる。で、恋人同士が二人乗りする

時には、彼女が荷台にまたがって彼氏の背中にしがみつく。
以上、私がテレビで見た知識。

だが、まさか恋人でも何でもない私達が、そんなことをするわけないだろう。

「俺の背中にしがみつけ」

「はあ？」

私の耳を疑った。

まさかでしょ？

「えっと、私、あなたとは恋人でも何でもないわけで…」

「二人乗り、したことないんだろ？俺にしがみつかなくても出来るが、しがみついたほうが安定する」

私は淡々と言う男子の背中をじっと見つめ、私は観念した。

私は恐る恐る男子にしがみつく。

すると、男子の体がピクツと反応した。

「…じゃあ、俺が123って言ったら、地面から足離せよ。」

私は黙ってコクリとうなづく。

私の顔は多分、真っ赤だ。

こんな風に男にしがみついたことなんて、一度もない。

「いくぞ…、1、2、3！」

男子がそういった瞬間に、私は地面から足を離した。

そのとたんに、ぐんつと自転車が動く。

「きゃあああ！」

私はぐらつく感覚に思わず叫んで、男子に思いっきりしがみつく。

第三話 いつも通りじゃない朝（後書き）

更新遅れてすみませんっ（<―>）

この頃疲れちゃってまして…。

いや、言い訳をするな、自分！

…すみません。

本当に疲れてるんです。

こんな作者を温かく見守ってください>（―――）<

それにしても、いろいろと文章がおかしいですし、中途半端なところで続きになっていきますが、気にしないで下さるとありがたいです。（小説家志望なのに何を言ってるんだ！）

後、男子の名前が出ていないのには訳がありますので気にしないでください（*^ー^*）

では、これからはなるべく土日更新するように頑張りますので、よろしく願います（^v^）

第4話 初めての二人乗り（前書き）

今回はすごく短いです…（<—>）

第4話 初めての二人乗り

「…声がでかい」

男子がうんざりだ、という口調で言う。

「だつてええ！」

こんな状況で黙っていられないって！

「気が散る！黙ってる！」

その男子の怒鳴り声で、私はやっと口を閉じようと試みた。ぐつと歯を食いしばる。

トクンツ、トクンツ。

不意に心臓の音が聞こえた。

男子の心臓の音だろうか。

そういえば、今まで叫びまわってたから気付かなかった…。
…って、今もしかして男子の体にびったりくつついてる？

「……………っ！」

私の頬がみるみる熱を帯びる。

今すぐ体を離したいけど、ここは自転車の上。

体を離すわけにはいかない。

「…名前は？」

「……………はっ？」

反応が遅れた。

突然話し出すからびっくりした…。

じゃなくて。

いきなり何を言い出すんだ、この人は。

「名前は、って聞いている」

男子の口調からすると、イラついているようだ。

イライラばかりして…。

この男子、ちゃんとカルシウムとっているのだろうか。

「…近藤花梨です」

名前を聞かれたのに黙っているのもおかしいかと思い、ぼそぼそと答えた。

「ふうん…」

男子は興味がなさそうに言う。

興味が無いなら聞くな！

私はそう思い、ぎゅっと男子の背中をつねる。

ささやかな仕返しだ。私に命令ばかりして。

「いてえ！」

私が背中をつねると、男子は叫び声をあげ、自転車がぐらつく。

「きやつ！」

私は必死で男子の背中に再びしがみつく。

ここで男子と折り重なって倒れるなんて、絶対に嫌だ。

「ばかやろう！何してんだよ！」

男子は悪態をつきながら、何とか自転車の体勢を立て直した。

「…わ、わざとじゃないし」

しまった。

私としたことが、どもってしまった。

「…そうか。ならいいけど」

男子は私がどもったことに対して、追及はしてこなかった。

ふっ。詰めが甘いな。

それにしても、運転の技術がすごいな。

私を後ろに乗せてるのに、体勢を立て直せるなんて。

「運転が上手いな…」

私は正直に思った感想を口にした。

「上手いって訳じゃねえよ。よく二人乗りするから、慣れてる」

「へえ…」

彼女とかしてるのかな…。

「…言つとくけど、彼女とかとはしてねえから。というか、彼女いねえし」

ふうん。そうなんだ…。

…ってか、この人私の心の中読めんの？

「よく弟が二人乗りしてくれってせがむから、慣れてんだよ」

男子は弟のことを話すとき、口調が柔らかくなった。

へえ…。

この男子、見た目はチャライ感じだけど、弟思いなんだ…。

私はなんか、温かい気持ちになって思わず微笑んだ。

第4話 初めての二人乗り（後書き）

こんにちわ（＾・＾）

作者です！

これからテスト期間に入るので、なかなか更新ができないと思います…。

多分、3月に入ってからになるかもです…。

すみませんm（——）m

後、お願いなのですが、できるだけ感想を書いてほしいです。いろいろ、この後の展開に生かしたいので…（*＾ー＾*）
よろしく願いしますっ！

あっ！

ですけど、無理をして書いてくれなくても大丈夫ですよ。

見てくださるだけでも、うれしいですから（＾＾）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3633q/>

君に伝えたい心の音

2011年10月8日14時49分発行